

スーパーグローバルハイスクール
研究報告
大阪府立能勢高等学校

II. 研究開発の概要

1 研究開発の実施期間

契約日～令和2年3月31日

2 研究開発構想名

国際協力の現場で判断力と実践力を培うグローバル人材研究

3 研究開発校の規模

全日制の総合学科高校であり、能勢町立能勢中学校（旧能勢町立東中学校・西中学校）との連携型中高一貫教育校である。定員は1学年80名。総合学科における科目選択につながる4つの系列を設置している（人文・理数、国際・情報、人間・環境、食・花・交流）。

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	総合学科	30	2	29	1	41	2	100	5

令和2年3月現在

4 研究開発の目的・目標

(1) 目的

① これまでの教育実践・関係性を活かす研究開発《生かす》

本校は、平成16年度の総合学科への改編時より、「国際・情報系列」「食・花・交流系列」「人間・環境系列」を設置するなど、国際交流や異文化理解、農業・環境教育（学校林を含め5ヘクタールの農場において、ブドウ・クリなどの果樹栽培、養蜂、里山保全などを実施）を重視してきた。また、平成26年度は「貧困削減・ジェンダー・コミュニティ強化分野グローバル人材研究」をテーマにSGHアソシエイト校の指定を受けた。こうした教育成果の蓄積や関係性を生かし、新たに国際協力分野での実践からグローバル・リーダーを育成する研究開発を実施する。またユネスコスクールとして持続可能な開発のための教育（ESD）の理念に基づいた研究開発とする。

② これまでの教育内容を深化・発展させる研究開発《深化する》

本校では、平成17年から多民族国家であるマレーシアへの修学旅行を実施し、現地の姉妹校との交流による異文化理解、さらには熱帯雨林での研修による農業・環境に係る学習等へと発展させてきた。また、平成19年度からはモンゴルのトルゴイトまちづくりセンター（Tolgoit Community Development Center=TCDC〔旧ジェンダーセンター〕）等の支援に向け文化祭での募金・販売活動を開始し、その活動を「ジェンダー」や「児童労働」等の人権学習につなげ、深めてきた。

当研究開発では、マレーシアで起こっている「資源の大量消費や大規模な開発による自然環境破壊の急速な進展」、モンゴルで起こっている「都市化の進行にともなう貧困の拡大によるストリートチルドレンの増加」に焦点を当て、これまでのマレーシアやモンゴルに係る学習や取組みを深化させ、国際協力の現場で判断力と実践力を備えたグローバル人材についての学びへと発展させる研究開発を行う。

③ 自らが課題に直面し考え実践する力を育てる研究開発《実践する》

5年間を通して、直面する課題を次年の取組みに反映させながら考えを深めていく。モンゴルでの「貧困とストリートチルドレン」、マレーシアでの「経済発展と自然破壊」といったグローバルな課題の解決に向けた研究開発とする。実際にモンゴルやマレーシアに赴き、これまでの農業の授業や環境学習で培った知識や技術をもとに、現地の支援団体等での活動や調査等のフィールドワークを体験する。自らが課題に直面することにより、当事者と国際協力の開発援助機関（JICA）、NGO、ボランティア等外部支援者との立場を明確にし、課題を解決するための方策に

について考える。さらに自立的な地域社会の構築と当事者と支援者の相互連携のあり方について理解を深めさせる研究開発を進める。

④ 国内外の大学との連携の中でグローバルな課題をともに考える研究開発《ともに考える》

ほぼ毎年修学旅行で訪れているマレーシアで、クアラルンプール大学との連携関係を構築させる。モンゴルやマレーシアで起きている問題や現状を把握し、同大学に持ち込み、研究者や学生と英語によるコミュニケーションにより、グローバルな課題をともに協議し考える研究開発を進める。大阪大学とは、外国語学部モンゴル語専攻今岡研究室とモンゴルのストリートチルドレン問題等について、大阪教育大学とは、マレーシア熱帯雨林の環境保全に取り組む教育学部化学生態学研究室と連携し、課題解決型授業を導入した研究開発を進める。また、大阪国際大学、公立鳥取環境大学とは、海外からの留学生との交流を中心に連携を図る。

⑤ 能勢町民とともに進める研究開発《ともに働く》

本校が所在する能勢町は、大阪府の北部に位置し、日本創成会議が発表した消滅可能性都市の全国 24 位に位置づけられた。この要因は大阪にありながら能勢町が交通不便な位置にあること、雇用の場が少ないことなどがあげられる。しかし近隣には、大阪北部の大きく良質な市場（マーケット）を持っており、既存の農産物直売所の売上高も全国トップクラスにあるなど、今後 6 次産業化による雇用創造は大きな可能性を秘めている。このような中、平成 26 年度に能勢町付加価値創造協議会を設立し、能勢高校も参加し、6 次産業化による内発型の雇用創出を推進している。これにより、能勢高校ブランドの商品化や国際協力による海外商品の販売支援も大きな可能性を秘めていると考えられる。自らが当事者となる地域において、能勢町など自治体との連携をはかり、地域産業のブランド化などの具体的支援事業のアイデアを実践することで、当事者でありかつ支援者であることの意義を理解し、地域の自治体や住民と協力することの重要性とその手法を深く学ぶことのできる研究開発を進める。

(2) 目標

① 現状を理解しグローバルな見識を持って判断できる生徒の育成

グローバル化した競争社会や自立が求められる地域社会など、どのような社会においても、課題の全体像を把握し、組織として機能させ、個々の人材が当事者としてあるいは外部者として能力を発揮できること、リーダーとして組織をリードできることが重要である。当事者や外部者の見識の違いを理解し判断する方法を学ぶとともに、国際社会や国内の地域で、個々の役割を理解し、地域に貢献できる生徒、現場から問題提起できる生徒の育成をめざす。

② 地域課題に直面し国際協力の手法を活用し実践できる生徒の育成

開発途上国の支援で行われている開発援助の手法として「貧困とストリートチルドレン」「経済発展と自然破壊」の取り組みを学び、また現地で活動することにより、大都市圏大阪でもできること、自分たちでもできることを考え、理解し、実践しようとする生徒の育成をめざす。

③ グローバルな視点を持って地域で協働できる生徒の育成

世界各地や日本の地域でも、それぞれ同じような課題があり、課題の解決に向けて必要とされる切り口や能力が同じであることを気付かせることが重要である。地域にある技術やノウハウが世界各地で必要とされている技術であることを理解し、世界で様々な探究や情報共有が行われ、自分たちの問題意識がグローバルな世界でも貢献できることを意識した生徒の育成をめざす。

④ グローバルな現場で能勢町や能勢高校を語る生徒の育成

能勢町は大阪北部の山間地にあり豊かな自然が残されている。また数少ない浄瑠璃文化が傳承されている地域でもある。こうした特性をしっかりと学び次世代に伝えようとするのが、グローバルな世界の相互理解につながることを理解できる生徒を育成する。このような人材像や能力、使命は、世界で共通して求められる課題解決能力にあたることを気付かせるカリキュラムの開発を行い、地域からグローバル化に柔軟に対応できる生徒の育成をめざす。

5 研究開発の内容

(1) スーパーグローバル基礎知識講座

1年次で全員履修する「産業社会と人間」、各教科、2、3年次で全員履修する「総合的な学習の時間」、各教科において実施する。開発途上国を支援する国際連合、国際協力の開発援助機関（JICA）、NGOの専門家、大阪大学、大阪教育大学等の研究者等を講師とし、大学院生をTAとして招へいして行う。講義やワークショップ等を通じ、当事者と外部者の関係を理解し、解決すべきグローバルな課題を学ぶとともに、グローバル人材になるための道筋を理解させる。

(2) スーパーグローバル重点分野講座

2年次の選択科目である、学校設定教科「生涯教養」・科目「スーパーグローバルスタディ」で実施する。課題研究のテーマについては、モンゴルでの「貧困とストリートチルドレン」、マレーシアでの「経済発展と自然破壊」等、年度ごとに設定する。関係する専門家等を招へいしての講義やワークショップ等を通じて、当事者と外部者の関係を理解し、具体的な解決へのプロセスなどを学ぶ。3人で1グループを構成し、大学教員の指導やTAの大学院生の協力のもと、課題研究のテーマを設定する。客観的な現状把握の方法、英語による理解、論文作成方法、英語コミュニケーション講座などにより、プレゼンテーション能力を高め、海外実態調査、クアラルンプール大学でのワークショップにつなげる。

(3) 海外実態調査

実際にモンゴルやマレーシアに赴き、スーパーグローバル基礎知識講座・重点分野講座及び農業・環境学習をもとに、現地の支援団体等での活動や調査等のフィールドワークを体験させる。自らが課題に直面することにより、課題を解決するための方策について考えさせ、さらに自立的な地域社会の構築と当事者と支援者の相互連携のあり方についての理解の深化を図る。

(4) クアラルンプール大学ワークショップ

経済活性化策と貧困軽減のための支援策について、海外実態調査の結果を同大学に持ち込み、研究者や学生とともに協議する。英語でのやり取りによりグローバルな課題をともに考える。

(5) 海外からの留学生とのワークショップ

大阪大学、大阪国際大学、公立鳥取環境大学英語村等に出向き、外国人教員や留学生と、環境保全問題や貧困等をテーマとしたワークショップを行う。グローバルな課題をグローバルな視点から考える。

Ⅲ.令和元年度 研究開発の実施計画

令和元年度、3年次生は大阪府立能勢高等学校生徒、1、2年次生は大阪府立豊中高等学校能勢分校生徒となり、SGH対象生徒は3年次生となる。以下のSGHの取組みを実施する。

(1)スーパーグローバル(SG)基礎知識講座、(2)スーパーグローバル(SG)重点分野講座、(3)海外実態調査、(4)国立プトラマレーシア大学でのワークショップ(WS)、(5)海外からの留学生とのワークショップ(WS)、(6)課題研究成果発表会、(7)研究開発成果の普及に関する取組み

(1)スーパーグローバル(SG)基礎知識講座(3年次生全員が受講)

次に示す力をつけるため「総合的な学習の時間」で講座を展開するとともに、担当教科が日々の学習活動の中でも取り組む。総合的にグローバルな視点から地域に貢献しようとする意欲を持つ生徒の育成をめざす。年度末に発表会を開きその成果を確認・共有する。

- ・論理的に考え表現する力・・・国語・英語
- ・データを活用し筋道を立てて整理する力・・・数学・情報
- ・グローバルな視点で課題を把握する力・・・地歴公民・理科・家庭・農業

(2)スーパーグローバル(SG)重点分野講座

3年次生では、環境に焦点を当てることで、能勢地域の環境保全の観点から地域課題にアプローチし、2年次で探究した課題とリンクさせ地域活性化に貢献する。具体的実践活動への参加や、後輩や学校外部への発信を通して、3年間の学びを深める機会とする。

3年次生[前年度選択科目「スーパーグローバルスタディ(SGS)」選択生徒15名]

- ・放課後演習、土曜日講習：
課題研究テーマ マレーシア「経済発展と自然破壊」—プランテーションと森林破壊—
- ・土曜日等の校外活動：
地域での成果発表。植林活動など地域の環境保全活動。住民への環境保全啓発活動。

(3)海外実態調査

実施期間を令和元年8月3日(土)～8月8日(木)とする。大阪教育大学 乾陽子准教授の指導のもと、マレーシア サバ州コタキナバル市において熱帯雨林、オイルパームプランテーションの調査を行う。国立プトラマレーシア大学(クアラルンプール)での研修とフィールドワークを行う。参加生徒については、SG重点分野講座選択生徒から4名を選抜する。

実態調査を通して、具体的な問題に対する解決手法を多層的・多角的に見ることで、地域課題への共通項を理解し、能勢高校生としての役割や何をすべきかを考える力を身に付ける。

(4)国立プトラマレーシア大学ワークショップ(WS)

海外実態調査で国立プトラマレーシア大学を訪問し、教員及び学生とWSを行う。英語課題研究発表を行い、教員・学生から評価を受ける。より客観性を持った課題研究に発展させる。

(5)海外からの留学生とのWS

3年次生全員が対象。本校を訪問する外国人学生と交流活動や交換プレゼンテーションを行う。英語での実践的コミュニケーションの機会とするだけでなく、異文化理解やグローバルな課題を考える機会となるようワークショップにおける話題・題材を工夫する。

(6)課題研究成果発表会

- ・中間発表会(全国公開) 11月8日 SG重点分野講座受講生徒発表
- ・研究発表会(全国公開) 2月8日 SG重点分野講座受講生徒発表
- ・プトラマレーシア大学研究発表 8月7日 SG重点分野受講生徒発表(英語)
- ・3年次生校内発表会(能勢地域公開) 1月 3年次生全員が発表
3年間の取組みのまとめとして課題研究を発表する。

(7)研究開発成果の普及に関する取組

英語版を含めた本校のホームページ(HP)や本校SGHのSNS(フェイスブック)、関係大学及び機関のHP(大阪大学、菊炭の郷、能勢町、(公社)国土緑化推進機構、(株)マザーハウス等)に掲載し普及を図る。また、能勢町では、商工会・ライオンズクラブ・観光協会・町役場・近隣商業施設にSGH通信を配布し、普及活動を行う。研究報告書については、関係大学及び関係機関、高校へ幅広く配布するとともにHPで公開する。研究開発成果についてはポスター作成等により周知に努め、中間発表会・研究発表会に加え、連携中学校、能勢町議会及び地域住民を対象とした成果発表会を開催し報告する。

また、本校遠隔ネットシステム(ネット教室)を活用し、豊中高校や遠隔他県高校に向けた発信、NTT西日本全国イベントにて課題研究を発表する。学校農業クラブ各種研究発表会、ユネスコスクール交流会、近隣地域主催のイベントも積極的に活用する。大阪大学外国語学部での講義に招へいされており、講義にてSGH取組みを発表し、学生、留学生とWSを行う。

令和元年度の研究開発実施計画

(1) スーパーグローバル (SG) 基礎知識講座

	3年次生：総合的な学習の時間・各教科
4月	「能勢版 SDGs」 (箕面こどもの森学園 藤田美保)
5月	「世界に繋がる自己表現～SGHの学びを地域に伝える～」 (Cheers Inc. 月田有香)
6月	普及活動①「Save The Children Japanの活動を地域へ活かす」 (セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 伊藤愛)
7月	「ボルネオ熱帯雨林の生態系と経済活動」 (大阪市立大学 祖田亮次)
9月	普及活動②「古民家活用を地域活性化へつなげる」 (農家民宿みちくさ 三上順子)
10月	普及活動③「古民家を生かした教育活動」 (コアプラス 武田緑)
11月	普及活動④「グローバルな視点からの復興への取組」 (立命館大学 久保田崇)
12～1月	課題研究、校内発表会 (能勢地域公開) に向けてのプレゼンテーション準備

(2) スーパーグローバル (SG) 重点分野講座

課題研究テーマ マレーシア「経済発展と自然破壊」ープランテーションと森林破壊ー

	3年次生：土曜日講習・放課後演習・地域での成果発表
4～8月	「マレーシア サバ州の熱帯雨林とプランテーション (全15回)」 (大阪教育大学 乾陽子) (大阪市立大学 祖田亮次) 「世界の視点から地域を再生する」「能勢を変えるための17の目標“能勢SDGs”を 考える」 (地域再生マネージャー 斉藤俊幸)
6月	「地域での発表～世界での学びを地域へ～」 (能勢中学校 先輩は語る会) 「フィリピンの貧困対策、マングローブ植林」 (オイスカ関西研修センター 清水利春)
9月	「世界での学びを地域へ伝えるには」 (Cheers Inc. 月田有香) 「地域への発信を考える」 (グループディスカッション)
10月	モンゴルの学びを生かす (モンゴル国立大学、モンゴル教育大学、大阪大学) 「SGHの学びを進路に生かす」 (トリガーワークス 松見敬彦)
11月	「SGHの学びを地域に伝え、生かす」 (地域再生マネージャー 斉藤俊幸)
12月	「SGHの学びを後輩に伝えるには」 (グループディスカッション)
1月	「2年次GS講座生徒に伝える～メンターとして指導～」 (Cheers Inc. 月田有香)
通年	植林等里山保全活動 (能勢菊炭振興会との協働活動：国土緑化推進機構「緑の募金事業」活用)
	「課題研究英語プレゼンテーション (全5回)」 (ナッチー 直子)

(5) 海外からの留学生とのワークショップ

内容等	期日・場所・協力大学等	回数	参加人数
マレーシア姉妹校の訪問受入・交流	令和元年6月～8月 本校	1	140
英語村訪問	令和元年7月 公立鳥取環境大学	1	30
デイキャンプ	令和元年10月 大阪国際大学	1	20
オイスカマレーシア高校の訪問受入・交流	令和元年10月 本校	1	140
イベント協働参加	令和元年11月 モンゴル祭り (在大阪モンゴル国総領事館)	1	10
長期・短期留学生の受入	平成31年4月～令和2年2月	通年	140



国際協力の現場で判断力と実践力を培うグローバル人材研究

目標

現状を理解しグローバルな見識を持って判断できる生徒の育成

地域課題に直面し国際協力の手法を活用し実践できる生徒の育成

グローバルな視点を持って地域で協働できる生徒の育成

グローバルな現場で能勢町や能勢高校を語れる生徒の育成

総合学科 連携型中高一貫教育校 エネスコスクール

課題研究のテーマ (SGH重点分野講座)



国際交流の経験・関係を活かした研究開発
農林教育の研さんを活かした研究開発
地域の課題解決にもつながる研究開発

「貧困とストリートチルドレン」
・子どもたちの教育 (H28)
・自立的な地域社会の構築と相互連携 (H30)
*フェアトレード、一村一品運動、農業による自立

「経済発展と自然破壊」
・木炭製造の中で消えゆく森林 (H27)
・エビ養殖とマングローブの植林 (H29)
・プランテーションと森林破壊 (H31)

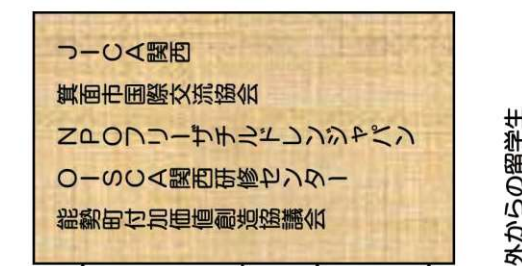
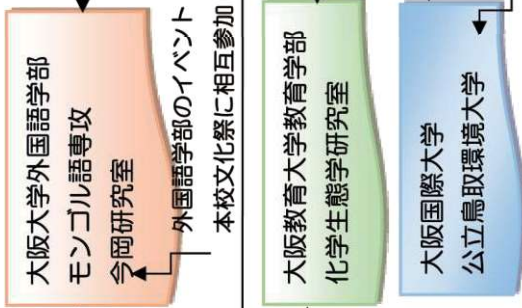
海外での実態調査 支援機関・大学等との連携



国内の大学との連携

国内の機関との連携

海外からの留学生との交流



1年次：産業社会と人間 農業と環境
2年次：総合的な学習の時間

2・3年次：(学) スーパーグローバルスタディ (選択)

研究開発のカリキュラム概要

スーパーグローバル基礎知識講座

- ・国連職員、JICA職員、NGOスタッフ、大学教授等による講義、ワークショップ等を実施。
- ・解決すべきグローバルな課題を知るとともに、国際協力分野の基礎的な知識を身に付ける。

スーパーグローバル重点分野講座

- ・「貧困とストリートチルドレン」「経済発展と自然破壊」に研究の焦点を当てる。
- ・外部専門家を招いたラーニングによる課題解決型の学習を展開する。

海外からの留学生との交流

- ・大阪大学、大阪国際大学、公立鳥取環境大学との高大連携により、外国人教員、留学生との環境や貧困等をテーマとしたワークショップを行う。
- ・グローバルな課題をグローバルな視点から考えさせる。

海外実態調査

- ・実際にモンゴルやマレーシアに赴き、現地の支援団体等での活動や調査等のフィールドワークを体験する。
- ・自らが課題に直面することにより、課題を解決するための方法を考える。

クアラルンプール大学でのワークショップ

- ・スーパーグローバル重点講座での学びと海外実態調査の結果をとりまとめ、マレーシアのクアラルンプール大学で報告・協議する。
- ・大学の研究者や学生とともにグローバルな課題について考える。

成果発表・発信

- ・英語版HPを創設。
- ・海外姉妹校、連携中学校、地元能勢町や大阪大学外国語学部とのイベント、JICAホスターセッション等でSGH活動の成果発表を積極的に行う。
- ・農業クラブやユニネスコスクールで報告

生徒全員が履修

IV. 研究開発の実施報告

(1) スーパーグローバル (SG) 基礎知識講座

■ 1、2年課題探究基礎講座〈SGH対象外のため、別項〉

■ 3年SG基礎知識講座

	3年生全員(43名):総合的な学習の時間
4~12月	各教科でのSGHの学び
5月	27日(月)「先輩は語る」(教育実習生 濱田理生)
6月	10日(月)「インプロ(即興劇)」(インプロ(即興劇)ファシリテーター 月田有香) 21日(金)「ひとづくり・まちづくり 高校生に期待すること」 (株)ノースプロダクション 近江正隆 ※能勢町教育委員会共催講座
7月	1日(月)「留学生プレゼンテーション」(留学生 オスカー)
9月	9日(月)「旅が教えてくれること」(農家民宿みちくさ 三上順子)
12月	23日(月)「学習発表会」
2月	15日(土)「SGH研究発表会」

■ 3年SG基礎知識講座① (総合的な学習の時間)

「先輩は語る」

- ◇ 実施日：令和元年5月27日(月)
- ◇ 講師：濱田 理生 (はまだ りお) 氏
四天王寺大学4回生 (能勢高校卒業生)
- ◇ 講座内容：
能勢高校卒業生である先輩が、社会科の教育実習生として帰ってきた。その先輩が進路や将来について、現役高校生に向けて自分の体験を交え、語った。



■ 3年SG基礎知識講座② (総合的な学習の時間)

「インプロ (即興劇)」

- ◇ 実施日：令和元年6月10日(月)
- ◇ 講師：月田 有香 (つきた ゆか) 氏 インプロファシリテーター
- ◇ 講座内容：
即興劇とは、台本なしで即興的な演技手法を用いて、俳優が自発的に演じる形式の演劇のひとつである。それを日常生活に取り入れて自己表現力を高めようというのが今回の目標である。そのインプロ(即興劇)のワークショップを行った。
アイスブレイクゲームで緊張がほぐれたところで、グループに分かれてお互いの信頼関係を築いていく練習を行った。3年生にとってはこれから受験や就職などコミュニケーション力が必要とされる場面に直面した際、今回のテクニックは大いに役立つと思われた。

■ 3年SG基礎知識講座③ (総合的な学習の時間) 2年GS (グローバルスタディー) 課題探究基礎講座②、

「ひとづくり・まちづくり 高校生に期待すること」

※能勢町教育委員会・能勢高校共催特別公開講座

- ◇ 実施日：令和元年6月21日(金)
- ◇ 講師：近江 正隆 (おうみ まさたか) 氏
(株)ノースプロダクション代表
- ◇ 講座内容：

近江氏は北海道十勝郡浦幌(うらほろ)町在住。生まれは東京だが、10代で北海道十勝に単身移住。酪農業、漁業を経験し、農山漁村である浦幌町にて、高校生のファームステイを受け入れるなど将来の日本を背負う若者たちに一次産業の大切さを伝えている。

浦幌町は現在人口約4,700人で、浦幌高校は平成22年に廃校となり、町の大人も中学生たちも高校再設置を切望している。今、地方創生が重要であること、地方創生には高校生の力が必要であることを話した。同じような問題を抱える能勢町で、高校生に何ができるのかを考える機会となった。



■ 3年 SG 基礎知識講座④ (総合的な学習の時間)

「留学生プレゼンテーション」

- ◇ 実施日：令和元年7月1日(月)
- ◇ 講師：留学生 オスカーさん
- ◇ 講座内容：

オスカーさんは今年度能勢高校にやってきた長期留学生である。彼の出身地であるタイについて高校生らしい視点で紹介した。

■ 3年 SG 基礎知識講座⑤ (総合的な学習の時間)

「旅が教えてくれること」

- ◇ 実施日：令和元年9月9日(月)
- ◇ 講師：三上 順子(みかみ ありこ)氏 農家民宿「みちくさ」オーナー
- ◇ 講座内容：

三上さんはバックパッカーとして世界中を旅し、ホームステイやファームステイの経験がある。今回はスペインへ旅行した際の話があった。フランスとスペインの両国にまたがるバスク地方、バルセロナ、美食の街サンセバスチャンなど、旅行のワンポイントをはさみながらの話は、まるでその町を旅しているかのような気分であった。

また、卒業旅行にどこへ行きたいかの問いかけに、生徒からは「タイへカオファン(昨年の留学生)に会いに行く」、「イギリスでアニメの聖地巡り」、「奈良で金魚釣り」など、国内海外問わず多くの意見が出た。

三上さんは能勢町に移住したことから、能勢町の魅力、住んでみて気付いたことなどに触れ、能勢町に住むことで自分のライフスタイルが確立したようだ。海外と国内の両方に目を向け、まさにグローバルの体現を感じた。



IV. (2) スーパーグローバル (SG) 重点分野講座

■ 3年 SG 重点分野講座

	3年生4名:放課後演習、土曜日講習、土曜日等の成果発表等
4月	13日(土)「菊炭と里山を未来につなぐ植樹会」(大阪能勢田尻菊炭振興協議会、国土緑化推進機構)
5月	8日(水)「SG 重点分野講座オリエンテーション」(能勢高校 SGH 担当教諭) 15日(水)「課題研究講座」(能勢高校 SGH 担当教諭) 22日(水)「パリスタから見た ドイツ人の環境問題への取り組み」 (ドイツ在住パリスタ 中村靖彦) ※能勢町連携講座 29日(水)「課題研究講座」(大阪市立大学 祖田亮次)
6月	5日(水)「掛川市におけるシュタットベルケの取り組み ～再生可能エネルギーを考える～」 (静岡県掛川市 久保田崇) ※能勢町連携講座 19日(水)「課題研究講座」(大阪市立大学 祖田亮次) 22日(土)「課題研究講座」(地域再生マネージャー 斉藤俊幸) 26日(水)「課題研究講座」(大阪教育大学 乾陽子)
7月	3日(水)「課題研究講座」(能勢高校 SGH 担当教諭) 6日(土)、17日(水)「課題研究講座」(大阪教育大学 乾陽子) 24日(水)「課題研究講座」(大阪市立大学 祖田亮次)
8月	自主活動「海外実態調査にむけて」「海外実態調査のまとめ」
9月	8日(日)「森の中の講演会」(森は海の恋人 畠山重篤)
10月	7日(月)「公立鳥取環境大学英語村、中橋研究室参加」(英語村スタッフ、公立鳥取環境大学 中橋文夫) 15日(火)「サラヤ(株)工場見学」(サラヤ株式会社) 21日(月)、28日(月)「課題研究講座」(大阪教育大学 乾陽子) 9日(水)、16日(水)、23日(水)「課題研究講座」(能勢高校 SGH 担当教諭)
11月	13日(水)「デザイン実習」(大阪大学 CO デザインセンター イステッキ・ジハンギル) 27日(水)「マレーシアのパームオイルとRSPO」(サラヤ 小辻昌平) 6日(水)、11日(月)、25日(月)「課題研究講座」(能勢高校 SGH 担当教諭)
12月	19日(木)「課題研究講座」(大阪教育大学 乾陽子) 2日(月)、4日(水)、9日(月)、11日(水)「課題研究講座」(能勢高校 SGH 担当教諭)
1月	15日(水)「課題研究講座」(大阪教育大学 乾陽子) 9日(木)、27日(月)、29日(水)「課題研究講座」(能勢高校 SGH 担当教諭)
2月	3日(月)、12日(水)「課題研究講座」(大阪教育大学 乾陽子) 10日(月)、17日(月)、19日(水)「課題研究講座」(能勢高校 SGH 担当教諭) 15日(土)SGH 研究発表会

■ 重点分野特別講座

	3年生 3名
全8回	5月～11月「SGH 課題研究をキャリアに生かす」(ライティングオフィス・トリガーワークス 松見敬彦)

上記のほか、放課後などに自習活動を行う。

■ 3年 SG 重点分野講座

能勢町里山保全活動「菊炭と里山を未来につなぐ植樹会」

平成 31 年 4 月 13 日 (土)

※Ⅳ. (4) 海外からの留学生とのワークショップと校外研修 参照

「SG 重点分野講座オリエンテーション」～SGH とは～

令和元年 5 月 8 日 (水)

◇ 講 師：内田 千秋 (うちだ ちあき) 氏 本校教頭、本校 SGH 担当教諭

◇ 講座内容：

スーパーグローバルハイスクール(SGH)として5年めにあたる本年度、3年スーパーグローバル(SG)重点分野講座とその継承事業となる2年グローバルスタディー(GS)課題探究重点講座の合同講座を行った。

まず、SGH 担当教諭から今後の授業の展開について説明があり、その後教頭より講座の趣旨など講座全般のオリエンテーションがあった。本年度は『経済発展と自然破壊～マレーシア オイルパームプランテーションと森林破壊～』と『能勢版シュタットベルケを考える～再生可能エネルギーと地方創生～』の2つのテーマを掲げ活動を進める。教頭からは「テーマにとらわれることなくグローバルな視点を持ってグローバルイシューと向き合い課題解決に挑んでほしい」と話があった。

後半は大阪大学 今岡良子先生より、「ピースマーケット」での課題研究発表について、当日参加する新電力に取り組む市民グループについて説明があった。本校及び市民グループの発表後、再生可能エネルギーについて市民グループと意見交換をする。

今年度も外部から多くの講師やゲストを招へいし、グローバルな高校生をめざして、自分たちができることは何かを追い求めていく。

「バリスタから見た ドイツ人の環境問題への取り組み」

令和元年 5 月 22 日 (水)

※第 1 回 能勢町連携公開講座

◇ 講 師：中村 靖彦 (なかむら やすひこ) 氏 ドイツ在住バリスタ

◇ 講座内容：

今回は、能勢町と本校生徒がドイツのブリロン市を訪問しシュタットベルケ(自治体所有の公益企業)を視察し、再生可能エネルギーや環境問題を考える実態調査に向けて能勢町との連携公開講座の1回めであった。高校生と町民と一緒に能勢町の持続可能なまちづくりを考えていく。

ドイツでコーヒーのバリスタとして飲食店のコンサルティングをするなど幅広く活躍している中村さんから、ドイツ人の環境への意識の高さなどの話があった。ドイツ人は徹底的に無駄を減らすことを国民レベルで取り組んでいること、環境活動は、特に高校生から20～40代の若い世代に広がっており、食品のラッピングを一切省いた『無包装スーパー』なども流行っているとの内容であった。

また、地域貢献に対する意識の高さは、根底にドイツ人の「地元愛」がある。それは仕事や通学で自分の生まれた場所を離れることが少なく「地元愛」が強いことで、民営電力会社より値段が高くても地元に貢献する(シュタットベルケから電力を購入する)ことを選ぶそう。明日から私たちができることとして、『レジ袋を断るなど必要のないものはもらわない。水・電気の無駄使いをやめる。買いすぎをやめるなど日頃の意識が重要である』と、具体的なアドバイスを受けた。ドイツの環境に対する姿勢やシュタットベルケがドイツに広がる理由を知ることができた。



「掛川市におけるシュタットベルケの取組み～再生可能エネルギーを考える～」

令和元年6月5日（水）

※第2回 能勢町連携公開講座

◇ 講師：久保田 崇（くぼた たかし）氏 静岡県掛川市副市長

◇ 講座内容：

この講座は、9月に能勢町と高校生がドイツのブリロン市を訪問し、シュタットベルケ（自治体所有の公益企業）を視察して再生可能エネルギーや環境問題を考える実態調査に向けて、能勢町との連携公開講座の2回めであった。高校生と町民と一緒に能勢町の持続可能なまちづくりを考えていく。

今回は能勢町長をはじめ、町内・町外よりたくさんの参加があり、能勢町在住のオランダ人の参加もあった。

久保田氏は出身地である静岡県掛川市で副市長になる前は、震災後の陸前高田市で副市長を務めていた。掛川市は、ドイツのシュタットベルケを手本とした掛川版シュタットベルケの令和3年からの始動をめざして準備を進めている。掛川版シュタットベルケは、掛川市の30キロ圏内に位置する御前崎市に浜岡原子力発電所があることを踏まえ、福島原発事故の経験から、電力を民間の電力会社に頼るだけではなく自治体運営の新電力会社を作り、その収益を住民サービスに充てる仕組みである。



でき、たくさんのアドバイスを受けた。



新電力会社の再生可能エネルギー利用では電気代が上がる傾向にあるが、上がった電気代に見合った公共サービスを充実させることができれば利用者は増えるだろうと久保田氏は考えている。

実際にシュタットベルケに取り組む自治体の話を聞くことができ、将来能勢町への導入を考える大きなヒントとなった。

講義後は、久保田氏を囲み、ドイツへシュタットベルケ視察に行く能勢町役場、能勢分校のメンバーで話をするこ

「森の中の講演会」

令和元年9月8日（日）

※ IV. (4) 海外からの留学生とのワークショップと校外研修 参照

「公立鳥取環境大学 英語村訪問」

令和元年10月7日（月）

※ IV. (5) 外国語教育の取組み 参照

「サラヤ(株)工場見学」

令和元年10月15日（火）

※ IV. (4) 海外からの留学生とのワークショップと校外研修 参照

「デザイン実習」

令和元年11月13日（水）

◇ 講師：イステッキ・ジハンギル氏 大阪大学 C0 デザインセンター トルコ人特任教授

◇ 講座内容：

大阪大学 C0 デザインセンターで学ぶ留学生（ドイツ、イギリス、ハンガリー、カナダ、ブラジル）・院生とイステッキ教授が、『問題を意識してデザインで社会に貢献する』をテーマに、能勢の特産品である栗から作った栗パウダーで世界に発信できる何かを作れないかというフィールドワークを行っており、地元の高校生からもアイデアを、というところから始まった。

留学生や能勢在住のこの取組みのクリエイターの方々も加わり、グループを作り、栗パウダーを作ったレシピを一緒に考案した。



栗はお菓子に使うものという固定概念を打ち破り、天ぷら粉のかわりに栗パウダーを使った“栗天ぷら”、モロッコのパンケーキに栗を合わせた“モクリン”、栗パスタなど、たくさんのアイデアが飛び出した。能勢の地域活性化についてグローバルな視点で考えることができた。

「マレーシアのパームオイルと RSPO」

令和元年 11 月 27 日 (水)

◇ 講 師：小辻 昌平 (こつじ しょうへい) 氏 サラヤ株式会社コンプライアンス推進担当課長

◇ 講座内容：

サラヤはヤシノミ洗剤などでおなじみだが、植物原料を使用する企業として、原料生産地マレーシア・ボルネオ島の環境保全に取り組んでいる。

前半はマレーシアでパームオイルの生産が急激に増えた背景と、「持続可能なパーム油」の生産と利用を促進する非営利組織、「持続可能なパーム油のための円卓会議」(RSPO)について学び、後半は、生徒がオイルパームプランテーションに関わる、“森の住民”“環境NGO”“消費財メーカー”“プランテーションオーナー”と立場の違う4つのグループに分かれ、自分たちの主張を考えて発表する、ステークホルダー(企業の経営活動に関わる利害関係者)ゲームを行った。このゲームを通して、自分たちの主張を突き通すことの難しさや、立場が異なると違った側面が見えてくることがよく分かった。小辻さんからは、「これが今マレーシアで起きていることの縮図だ」との話があった。すべての人たちが納得する方法を探すのは難しいが、自分たちとは違う考え方もあることを理解するのはとても大切なことだと感じた。



「課題研究講座」：祖田先生 全3回

◇ 講 師：祖田 亮次 (そだ りょうじ) 氏 大阪市立大学教授

◇ 講座内容：

本年度の課題研究テーマの一つである「マレーシア 経済発展と自然破壊」について、マレーシア ボルネオにおける熱帯雨林とオイルパームプランテーションに関する講演およびワークショップを行った。祖田先生には平成 29 年度の SGH 講座でも講義を受けており、今回もボルネオでの海外実態調査へ向けた学習で指導を受けている。

5月29日(水)：マレーシア サバ州について

海外実態調査を行うボルネオ島サバ州について学習した。最初に『能勢町とボルネオのどちらが“田舎”か?』という設問で、能勢町とボルネオの面積・人口・人口密度などを比較しながら身近な感覚でボルネオ・サバ州のイメージ形成をした。サバ州にはマレー系をはじめとした70以上の民族が存在しイスラム教をはじめ様々な宗教が混在していること、世界最大の花ラフレシアやテングザル、ヒゲイノシシなどの生物の写真を見てボルネオの熱帯雨林の生物多様性などについて学んだ。

後半は、この熱帯雨林の多様性をおびやかしているオイルパームプランテーションの開発について学習した。1950年からの熱帯雨林の変化を見て、森林が急激に減少している様子がわかった。ワークショップとして、グーグルアースの上空写真でプランテーションの開発の様子を観察し、面積測定機能を使ってその規模を確認した。大きいものでは能勢町(約100平方キロメートル)が5つぐらい入る規模のプランテーションもあり、その広さに驚きの声が上がった。オイルパームプランテーションの問題点を深く掘り下げることで、今後の課題研究に向けての貴重な機会となった。

6月19日(水)：オイルパームプランテーションを考える

海外実態調査で訪れるオイルパームプランテーションについて話があった。まず、環境、労働者、土地など、プランテーションが抱える問題を考えた。問題を解決するために、WWFが支援している(RSPO)『持続可能なパーム油のための円卓会議』という認証制度があるが、企業がこの認証を取得するには資金面などハードルが高く、マレーシアでは(MSPO)『マレーシア持続可能なパーム油』という独自の認証制度を作り、これが徐々に国内では広まりつつある。また、パームオイルやヤシ殻を使ってのバイオマス発電が日本でも広まっているが、熱帯雨林保護の観点から考えると、本当に環境にやさしい発電かについては疑問であるとの話があった。何事にもプラス、マイナスの面があり、様々な方向から考え慎重に判断しなければならないことを学んだ。

また、海外実態調査でプランテーションを訪れた際に、どんなことを見るべきか聞くべきかの具体的なアドバイスもいただき、次第に調査への実感が湧いてきた。実態調査及び課題研究に向けて貴重

な学びとなった。

7月24日(水) :

マレーシア実態調査前に現地でのプレゼンテーション、質問内容など最終調整を行った。



「課題研究講座」：齊藤氏 全1回

- ◇ 講師：齊藤 俊幸（さいとう としゆき）氏
総務省 地域再生マネージャー
- ◇ 講座内容：マレーシアへ行くぞ！

6月22日(土) :

齊藤氏は地域活性化伝道師（内閣官房）、総務省地域再生マネージャー、地域経営の達人（総務省）など、地方創生に関わる様々な役割を担い、世界中を飛び回っている。

海外（マレーシア）実態調査の事前学習として全国各地の地域おこしの事例、マレーシア・ボルネオのサバ州の地域おこし産業の現状など、実態調査を前に知っておくべき情報を数多く示してもらった。実態調査を前にマレーシアで学んできたことが、能勢町の地域創生への大きなヒントになるだろうと感じた。



「課題研究講座」：乾先生

- ◇ 講師：乾 陽子（いぬい ようこ）氏 大阪教育大学准教授
- ◇ 講座内容：

乾先生は大阪教育大学化学生態学研究室でボルネオの熱帯雨林の植生や昆虫について主に研究しており、8月および1月に行うマレーシア実態調査の事前学習の他、先生には今年一年間 SG・GS 重点講座の課題研究を指導いただく。

6月26日(水) :

熱帯雨林の現状として、先生がフィールドワークの拠点としているマレーシア・ボルネオ島サラワク州にあるランビルヒルズ国立公園の話があった。マレーシアでも1億年前の原生林が残るのはこの公園のみで、他は全て伐採しつくされたこと、1960年代から始まった伐採の最大の輸出国が日本だったなどの話があった。

乾先生からは、『熱帯雨林が必要かというのはその人の価値観に委ねられる』と話があった。現在、マレーシアは急速なスピードで経済成長が進んでおり、それは森林伐採を行っていたころの日本の状況と同様である。国の発展のためなら森林破壊も仕方ないという考え方もあり、環境保全を訴えるだけで解決できる問題ではないということである。

現地で何を見て聞いてくるのか、講義からたくさんのヒントを得ることができた。

7月17日(水) :

マレーシアの実態調査を目前に控え、前半はマレーシアの熱帯雨林を中心に話があり、後半はマレーシアで行うプレゼンテーション



についての指導となった。

パワーポイントの作り方ではフォントの使い方や色の組み合わせ、写真の加工方法など具体的なアドバイスのほか、マレーシアでは英語でプレゼンテーションを行うため、その際の注意点も教わった。海外では、プレゼンをする際に『SUSHI』にポイントをおいており、S-self intro(自己紹介)、U-urgent(つかみ)、S-summary(概要)、H-heading(トピック)、I-info(インフォメーション)を表している。また、「人にやさしいプレゼンを心がけて」とのアドバイスがあった。



10月21日(月)、28日(月)：

SGH 中間発表会に向けて、プレゼンテーションの途中経過を発表した。その後、具体的なアドバイスとして、実態調査の報告だけではなく、実際に現地で見えてきたこと、聞いてきたことをもっと取り入れること。パワーポイントには文章ではなく単語を入れ、できるだけ見やすく簡潔にすること、などがあった。

12月19日(木)、1月15日(水)、2月3日(月)、12日(水)：

研究発表会に向けて、発表準備のための授業であった。1月に修学旅行に先立ってマレーシアのサラワク州ボルネオ島で行った現地調査と、マレーシアへの修学旅行から戻り、新たにわかったことや疑問をどのように発表に入れていくかを考えた。乾先生からの確かな指導やアドバイスがあり、生徒たちも熱心に聞いていた。

「課題研究講座」：自主講座

先輩に学ぶ：5月15日

海外研修前講座：7月3日

マレーシア海外実態調査準備：7月10日、7月27日、7月31日

マレーシア海外実態調査まとめ：8月28日、9月11日、9月16日

プレ課題研究GS始まる：10月9日

中間発表会にむけて：10月16日、10月23日

最終発表会に向けて：11月6日、11月11日、11月25日、12月2日、12月4日、12月9日

最終発表会に向けての発表練習：12月11日

最終発表会に向けて：1月9日、1月27日、1月29日、2月10日

SGHまとめ：2月17日、19日



■ 3年 SG 重点分野特別講座

「SGH 課題研究をキャリアに生かす」：松見氏 全8回（5月～11月）

◇ 講師：松見 敬彦（まつみ たかひこ）氏 ライティングオフィス・トリガーワークス主宰

◇ 講座内容：SGH 課題研究をキャリアに生かす

モンゴルやマレーシアでの環境保全や地方創生を、能勢町の活性化に活かす方法を考える講義とワークショップを行った。SGH 課題研究で学んだことを今後のキャリアに生かすために、自分の問題意識を明確にし、論理的に構成したプレゼンテーションを作るための方法や自己表現の方法を学んだ。



IV. (3) 海外実態調査

● SGH マレーシア実態調査

8月4日(日)～8月9日(金)の6日間、マレーシアでSGH実態調査を行った。

3年SG重点分野講座受講生4名と2年GS課題探究重点講座受講生2名が参加した。今年度の課題研究テーマは「『経済発展と自然破壊』～マレーシア オイルパームプランテーションと森林破壊～」である。現地で詳しい調査を行うべく、クアラルンプール経由でコタキナバルへ向かった。

1日め：8月4日(日)

関西国際空港で、校長先生や旅行会社の方の見送りを受け、地域再生マネージャーの斉藤先生と合流し、9時55分にマレーシア航空に搭乗した。16時にクアラルンプール空港へ到着し入国審査を終え、コタキナバル行きの出発を待った。ここで、課題研究授業でお世話になっている、大阪市立大学地理学 祖田先生と合流した。祖田先生は現地の大学で講義をするためマレーシアへ来ていた。素晴らしい偶然だった。待ち時間中に先生よりミニレクチャーを受けた。18時10分にクアラルンプールを発ち、21時にコタキナバル空港へ到着した。ボルネオ島サバ州コタキナバルである。日本を出発して10時間以上が経過していた。空港からバスで15分ほどの中心部にあるホテル『ホテルシャングリラ』に着いた。

2日め：8月5日(月)

ホテルを7時に出発し、世界遺産でありマレーシア最高峰であるキナバル山に向かった。標高4,095mと富士山より高い山である。ここで祖田先生の知り合いの、インドネシアを専門とされる地理学者の小泉先生と合流した。キナバル山へ向かう途中、朝市が開かれている村に立ち寄り、雄大な山の全景を見ながらランブータン、ドリアン、マンゴスチンなど東南アジアのフルーツを堪能した。キナバル山中腹、標高1,500mにあるキナバル植物園に着いた。ここは世界遺産の一部で、熱帯雨林の生態を自然の姿のまま保護している。ガイドの説明を聞きながら、様々な熱帯雨林の植生を見学した。植物園をあとにし、Mount Borneo Restaurantで中華の昼食をとった。

昼食後は再びガイドと共にキナバル山の調査に入った。キナバル山にはサバ州唯一の温泉が湧いており、様々な国の人々が利用していた。さらに奥へ歩くと、吊り橋4本を渡るキャノピー・ウォークがある。もともとの目的は熱帯雨林を調査するためのものだ。地上から30～50mの高さがあり、高所から見渡す限りの深い緑の原生林を見ると、この熱帯林が後世まで残ることを強く願わずにはいられなかった。次に、最大の見所である世界最大の花ラフレシアを見学した。蕾から開花まで9ヶ月かかり、開花の期間は一週間から10日と言われる貴重な花に遭遇することができた。大きさは60cmで、開花して8日めだった。その後、市内のホテルに戻った。



3日め：8月6日(火)

8時にホテルを出発し、コタキナバルを130キロ南へ下ったところにある、Sawit Kinabalu工場へ向かった。ここではオイルパームプランテーション見学と工場での聞き取り調査を行った。現地ガイド、マレーシア人のヴィーさんはキナバル山麓の山岳農家出身のルスン族で、日本語が堪能だった。19年前に福岡で農業研修を受けていたそうだ。10時半、工場のあるボーフォート村に到着。Sawit Kinabalu工場は半官半民のオイルパームプランテーションである。まずはナサリー(アブラヤシの苗場)を見学した。年間8万本の苗木を売り、1,200万円の利益があるそうだ。従業員は18人で全員地元住民だった。次にプランテーションへ移動し、オイルパームの収穫作業を見学した。高い枝から切り落としたヤシの実一房の重さは30～40kgもあり、容易には運ぶことができないかなりの重労働だった。プランテーションの広さは1,729ha、周辺の契約農家を含めると3,000ha以上という広大な面積である。ドローンで空撮を試みると、その広さを肌で感じる事ができた。しかしここが以前は熱帯雨林だったのだ。ここでは160

人の従業員が働いており、95%がインドネシア人だった。

このプランテーションから1 km ほど離れたところにあるオイルパーム工場へ移動した。会議室で社員より会社概要の説明があった。巨大な工場内は写真撮影が禁止だった。残ったアブラヤシの搾りかすからガスを作るバイオガス発電も行っており、工場で使われているようだ。また、プランテーションでは下草を家畜に食べさせることで除草剤の使用を減らすなど、環境にやさしいことを強調していた。環境保全と経済活動について考える一日となった。



4日め：8月7日（水）

農業食品工業省サバ農政局を訪問した。代表アシスタントの Chong さんから、サバ州の農業全般の状況説明があり、パームオイルが農業生産物全体の 87.9%を占めているが、今後はドリアンやパイナップル栽培にも期待しているとのことだった。また、こちらからのたくさんの質問にも丁寧な答えがあった。

次に、マレーシアパームオイル庁 MPOB のアムランさんの案内で、コタキナバルから南へ車で1時間半のパパラ村にある村で小農の方々にインタビューを行った。小農とは、自分の土地をオイルパームプランテーションに変えてオイルパームを収穫し工場に出荷する、個人のオイルパーム農家である。以前は公務員だったが土地を所有していたためオイルパーム農家に転向した方は、まだまだプランテーションだけでは食べていけないと語っていた。その中で環境保護を優先するのは難しいように感じた。アムランさんからは、日本でもっとパームオイルを使って小農の生活を助けてほしい、と言われた。正解のない難しい問題であり、課題である。

インタビューが終わり、市内へ戻る途中ローカルな食堂でマレー料理を堪能し、ホテルへ戻った。3日間の充実した調査にやや疲労が見えたため、体力の残っている者だけ、市場見学やキナバル市の観光スポット“ウォーターフロント”を楽しみに出かけた。



5日め：8月8日（木）

調査最終日はコタキナバルからクアラルンプールへ移動だった。コタキナバル滞在中にお世話になったガイド兼通訳のヴィーさんと“Jumpa lagi また、会いましょう”と、別れのあいさつをした。コタキナバル空港へ到着すると、悪天候のため飛行機が来ず、3時間遅れでクアラルンプール空港に到着し、急いでプトラマレーシア大学 (UPM) へ向かった。

大学が閉まる時間になっていたにもかかわらず、先生や学生は待っていてくれており、マレーシアにおけるパームオイル産業についての学習ができた。能勢高校による英語プレゼンテーション「能勢町の紹介、今回の研修報告」に続き、九州工科大学で博士号を取った UPM の先生による講義があった。熱帯雨林破壊が問題になっているが、マレーシアにとってパームオイルは国を支える大切な産業であり、産業が地域を守っているという話があった。マレーシア側の貴重な意見を聞くことができた。また、大学では廃油を持ち寄り、バイオディーゼルを大学の電力として使うなど、いろいろな活動を行っていることも知る事ができた。大学をあとにし、帰国するためクアラルンプール空港へと向かった。

5日間という短い期間だったが、中身の濃い充実した調査活動ができた。日本では決して知り得なかったパームオイル産業の実情や、現地の人々の思いや考えを聞くことができた。帰国してからは中間発表会、研究発表会へ向けてさらにこの調査で学んだことを深めた。

日程表

日次	月 日	曜	発着地・滞在地	現地時間	交通機関	摘 要
1	8月4日	日	関西国際空港	7:30	MH53	関西国際空港に集合 空路にてマレーシア クアラルンプールへ
			関西国際空港 発	9:55		
			クアラルンプール空港 着	15:50	MH2638	空路にてコタキナバルへ 入国審査後、専用車でホテルへ
			クアラルンプール空港 発	18:10		
			コタキナバル空港 着	20:45		
			コタキナバル	21:30		
2	8月5日	月	コタキナバル空港	滞	専用車	ホテルにて朝食 キナバル山 キナバル植物園 ラフレシア キャノピー 夕食 (コタキナバル 泊)
				9:00		18:00
3	8月6日	火	コタキナバル	滞	専用車	ホテルにて朝食 プランテーションと工場『Sawit Kinabali Sdn Bhd』 夕食(フードコート) (コタキナバル 泊)
				9:00		18:00
4	8月7日	水	コタキナバル	滞	専用車	ホテルにて朝食 農業局 ヒアリング 個人農家への聞き込み (MPOB紹介) 小農 ヒアリング 夕食(フードコート) (コタキナバル 泊)
				9:00		11:00
				18:00		
5	8月8日	木	コタキナバル		MH2613	ホテルにて朝食 専用車にてコタキナバル空港へ 空路にてクアラルンプールへ
			コタキナバル空港 発	7:30		9:55
			クアラルンプール空港 着	12:25	専用車	市内レストランにて昼食 ブトラマレーシア大学訪問 (生徒プレゼンテーション、大学からレクチャー) 2時間 レストランにて夕食
				午後		
			クアラルンプール空港 発	22:10		MH52
6	8月9日	金	関西国際空港	着		到着後、入国手続きを済ませ、解散